

美人コンテストの舞台裏と「ミス」たちのその後

依田 ひかり *

華やかなフィナーレを迎えるために、美人コンテストに参加する女性たちは何と向き合うのだろうか。また、彼女たちは「ミス」になってどのような人生を歩むのか。筆者が2019年8月から10月までジャカルタ特別州で行なった聞き取り調査を元に、インドネシアの美人コンテストについて報告する。

インドネシアの美人コンテスト

昨今インドネシアでは、美人コンテストへの関心が高まっている。スハルト政権期には、商業や観光促進の目的として開催を許されたプトゥリ・インドネシアを除いて、美人コンテストの開催は法的に禁止されていたが、その後民主化を経て自由化されると、毎年開催される大規模な国内大会や、その優勝者の国際大会における順位に高い関心が寄せられるようになった [Fajarini 2014: 489-490]。インドネシアは2005年以降本格的に国際大会へ参加するようになったが、1950年代から継続的に国際大会へ出場してきたフィリピンとタイに続いて21人の入賞者と1人の優勝者を輩出しており、東南アジア地域で頭角を現している。¹⁾ 主要大会は毎年テレビで放送され、観光業界やファッション・美容産業界

からの支援も手厚い (写真1)。

また、スハルト政権期における美人コンテストは、非公開で審査員も明らかでない場合が多かったが、近年インターネットの普及やSNSの流行によって国内外のコンテスト情報が活発に共有されるようになっただけでなく、主要大会ではインターネット投票による人気賞の枠を設けるようになり、出場者もSNSを通して積極的に観衆とコミュニケーションを図るようになるなどその様式も変化した。このように短期間で大きな変化を迎え、現在活況を呈するインドネシアの美人コンテストでは何が問われ、女性たちは何を得的のだろうか。



写真1 滞在先のテレビで放送されていたミス・グランド・インドネシアの決勝戦

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) フィリピンは91人の入賞者 (内優勝者15人)、タイは49人の入賞者 (内優勝者3人)。

美人コンテストの評価基準

各主要大会の応募条件は、17歳から25歳の未婚女性、身長は165センチメートル以上で一般教養をもつインドネシア国民であることが共通点として挙げられるが、具体的な審査基準は書かれていない。

2006年に情報共有サイト「インドネシア・ページェント・ドットコム」を逸早く開設し、美人コンテストでの審査員経験もあるムキエ・ダラドジャ氏に候補者たちの外見的特徴について話をうかがった。同氏によると、最も重要なパーツは2つある。ひとつ目は、肌である。なぜなら、メイクで顔の雰囲気や造形をいじることはできても、肌の質感を変えることはできないため、最終選考のテレビ放送で美しさの審査に決定的な影響を与えるからだ。「清潔で、なめらかな肌」が良いようで、意外にも白さは重要でない。むしろ、ミス・ワールドやミス・ユニバースでは、アジア人らしい褐色肌が好まれる。2つ目は、歯である。歯の審美的重要性は世界共通である一方、美しく整えるまでに時間を要するため、勝てる候補生は既に美しい歯をもっているという。

美人コンテスト出場経験者へのインタビューで外見について聞いてみると、重要なパーツとして肌、歯、身長が同様に挙げられた。しかし、そもそも美人コンテストで外見的魅力は重要ではなく、内面の美の準備に多くの時間を割くという意見が圧倒的に多かった。実際、世界四大大会では、フェミニズムから批判された外見の序列化を避けることや、人々の多様性を認めることを背景に、内

面の美が重要視されており、この影響が国内大会に出場する彼女たちにも及んでいる。

内面の美？

美人コンテスト出場者向けの著名なトレーニング事務所「ラトゥ・スジャガッド」の代表者2人によると、美人コンテストで測られる内面の美とは、パブリックスピーキングや質疑応答（一般教養）を通して測られる「知性」と「自信」だという。

主なレッスン内容は、パーソナル・ブランディング（自分の磨き上げ方に関するヒアリング）、キャットウォークとポージングの練習、ステージでの所作の指導（美しい立ち方など）、メイクやスタイリングの指導、パブリックスピーキングの練習（英語や発声の練習）、そして質疑応答の練習である。どの大会に出場するかは、候補生の出場経歴や興味関心、学歴、性格に合わせて進めるが、レッスンは2週間で済む者もいれば約半年かかる者もいるという。代表のひとりであるトマ・ガルトム氏によると、「内面の美しさに磨きをかけるために、（その期間には）個人差がでる。（中略）特に、スピーチ慣れしていない生徒は泣き出すこともある」という。実際に同事務所やほかのトレーニング事務所も含めてレッスンに参加したことのある女性たちに話を聞いてみると、「ウォーキングよりも質疑応答やパブリックスピーキングの練習に多く時間をかけた」、「本当にきつかった」という声が多かった（写真2）。

ほかにも、ミス・ワールドでは、社会貢献活動を行なうことで外見以外の美、内面の美



写真2 2019年プトゥリ・インドネシアのファイナリストたちと筆者

を審査する。世界最古の世界的美人コンテストでありながら、水着審査の廃止を率先して行ない、スローガンとして「目的のある美 (Beauty with a Purpose)」を掲げ、各国の地域予選からSDGsへの取り組みを審査に入れるなど社会貢献の側面を強く出している。国内予選を勝ち抜いた代表者は、各国に存在する社会問題に取り組む様子を動画にしてYouTubeに掲載する。その動画で最も高い評価を得ると、ビューティー・ウィズ・ア・パーパス・アワードの勝者として最終予選に進むことができるのだ。

このビデオ制作に携わるオーガナイザーであるムハマド・アリフ・キルディアット氏にお話をうかがった。彼は、「いいビデオを作るうえでの鍵は、世界中の人々の心を動かすことだ」と語った。具体的には、山奥に住んでいて通学が困難な子どもたちのために橋を架けるプロジェクトや、貧村で安全な水を確保するためのプロジェクトなどである。これらのプロジェクトに、美しい若い女性が汗水たらして参加することで、彼の言葉を借りる

と「ジャーナリズム・アイル・マタ (涙のジャーナリズム)」が完成する。ジャーナリズム・アイル・マタとは、国や地域を問わず観衆皆が心打たれるお涙頂戴要素の詰まった報道を指すそうだ。

感動的なプロジェクトは、美人コンテストの大義的な開催目的である平和や親善の達成のために適当な審査方法だが、これで内面の美や知性を測れるかは疑問である。外見的美だけでなく個々の多様な在り方を認めるために内面の美が重要視されてきたが、不可視で画一化することのできない内面の美こそ本来多様性に富んでいることを考慮すると、個人の内面を課題や規準に沿って順位をつけることは、外見を判断して序列化することよりも残酷に感じられる。また、自信の有無についても結局、ミスたちの話し方やウォーキングなどの振る舞いといった視覚的情報から審査員が主観的に判断するほかない。その意味では、内面の美を測るために外見の美が決定的に重要である。

フィナーレの後に

他方で、美人コンテストに出場した女性が、外見的评价のみを受けて皆女優やモデルになるというわけではない。美人コンテストで個人の実力が認められ、大会出場経験を糧にその後の人生を歩む「ミス」たちに今回の調査で多く出会った。

そのうちのひとりが、マリア・ハルファンティ氏 (27歳/ジャカルタ出身) である。彼女は、2015年にミス・インドネシアに出場した。出場動機については、「昔から背が

高いから、周りの友達が（自分に）コンテストに出るよう勧めたりすることがあって、（中略）（当時）大学4年生ですることもなく、時間を持って余してたから出てみた」と述べた。野心や明確な目標があって参加したわけではない彼女だったが、ミス・インドネシアに選ばれ、ミス・ワールドに出場し、世界3位の座に輝いた。ミス・インドネシア財団が優勝者に課す契約期間は5年間と長く、その間はミス・ワールドの広報活動やファッション雑誌の表紙を飾るなど華やかな世界に身をおいた。同時に特筆すべきは、「Yayasan Bangun Sekolah（学校建設財団）」を個人で設立し、美人コンテストで知り合った企業から寄付を募って、老朽化が進む田舎の小学校を立て直したり、資材を寄付して教育環境を向上させたりするプロジェクトを実施していることだ。筆者もこのプロジェクトを見学させてもらった（写真3）。汗だくになりながら子どもたちと交流した後、真剣な顔でドナーに計画書の確認を行なう彼女は、より一層輝いているように見え、「これが世界3位の実力か…」と思わざるをえなかった。彼女は児童教育や栄養学に興味をもっており、ミス・インドネシアの契約が切れた後もこの活動をライフ・ワークにするそうだ。

美人コンテストについては、外見だけで社会的上昇を図れる手段のひとつとしてそれを利用する女性の事例や、その構造的問題を批判することに注目が集まりやすい。しかし実



写真3 寄付先の小学校にて（右から3番目がハルファンティ氏）

際には、各美人コンテストが候補者に求める素質の中に内面の美や知性といった曖昧な概念（語学能力やバイタリティなど）が含まれる。さらにそこには一定の文化資本が必要なため、インドネシアの美人コンテストで成功することは有能な女性であるというステータスを獲得させ、個のキャリア形成の糧となることに意味があるだろう。また今回の調査では、美人コンテストに参加する女性たちが判断される対象としての枠組みを超えて、「ミス」としての人脈を活かしながら主体的に活動する姿を見ることができた。今後も、彼女たちを中心に、インドネシアで急成長する美人コンテストの社会的影響力について研究したい。

引用文献

- Fajarini Inda, A. 2014. Kontroversi Miss Indonesia Tahun 1982–1984, *e-Journal Pendidikan Sejarah* 2(3): 488–498.